

不屈の女性 万愛花大姉

陳麗菲¹ (訳者 李青凌²)

万愛花は抗日戦争の女性兵士であり、第二次世界大戦時の日本軍「慰安婦」制度による中国人被害者のなかの典型的で代表的な人物である。彼女は1940年代、日本軍によって3回も慰安所に強制連行された。1992年に日本へ行き、東京で開催された「日本の戦後補償に関する国際公聴会」でカミングアウトし、日本軍が犯した暴行を勇気をもって暴露し、「日本軍『慰安婦』制度被害者の中で最初の中国人対日訴訟者」と呼ばれることになる。2013年9月4日0時45分、この勇敢で強堅な中国人女性は、山西省太原市で亡くなった。享年84歳。

一、苦難の生い立ち

万愛花の旧名は劉春蓮(リュ・チュンリェン)である。1930年1月11日に内モンゴル自治区河林格爾県の韭菜溝村に生まれた。家は貧しかったため、転々として山西省孟県羊泉村の人に「童養媳」³として売られ、「靈玉」(リンユイ)と改名された。1938年、日本軍が孟県に侵入した。万愛花は、「私は小さい頃から他人をいじめる人たちを嫌い、人殺しや放火をする日本鬼子⁴が我々中国人を虐待することを、さらに憎んだ。彼らは何のために我々の土地に来たのか。私は共産党の話聞き、敵との闘争の積極分子になった。私は率先して児童団に参加し、児童団の団長として選ばれた。……その後、共産党に加入した。私はまだ若いにもかかわらず、人生で多くの回り道をしていろんな災難に遭ったため、一緒に党で工作活動をしていた人々は私に同情した。八路軍第19団の団長劉桂華は、それゆえに私の名前を「克災」と改め、今後も災難を克服し、全て順調にいくようにと望んでくれた。私は積極的に工作活動を行い、羊泉村の村支部委員(共産党側)になり(当時は小区委員とも呼ばれた)、副村長、婦教会⁵主任にと、相次いで就任した。当時、みんな共産党の地下黨員であり、秘密の工作活動であるため、他人・「漢奸」⁶・日本鬼子に知られるのはいけなかった」と述べている。

1943年の春、日本軍は羊泉村を掃討した。靈玉は病気だった義理の父親を看病するため

¹ 原著者の陳麗菲は、中国上海師範大学教授、中国「慰安婦」問題研究センターの研究員。長年にわたって日本軍「慰安婦」制度の中国人被害者に注目し、彼女たちと親しくつき合いながら聞き取り調査と研究に取り組み、被害状況を明らかにしてきた。

² 万愛花大娘の10周忌を機に、もっと万愛花大娘を知ってほしい、ぜひ読んでいただきたいと願い、翻訳した。文中の全ての脚注は、訳者が付けたものである。

³ 童養媳：旧中国の風習。将来、息子の嫁にするため幼時他家に引き取り、育てられる女兒。

⁴ 日本鬼子：恐怖と憎悪の感情が込められていて、侵略した日本兵を指す言葉。

⁵ 婦教会：婦女救国会。

⁶ 漢奸：中国人の裏切り者。

に逃げることができず、捕まった。彼女は他の女性4人と一緒に戦利品として、日本軍により進圭拠点まで連行された。進圭社は山のすそ野につくられた小さな村である。日本軍に占領された後、山上に砲台やトーチカが築かれた。日本軍はその周辺の窰洞（ヤオトン）⁷で暮らしていた村民たちを追い出し、窰洞を強制的に占領した。少女たちはその窰洞に閉じこめられ、獣のような日本軍に輪姦された。裏切り者の密告のせいで、霊玉が抗日活動に従事していることが知られてしまった。日本鬼子に拷問されても、霊玉は歯を食いしばって認めることを拒否していた。ある日の深夜、彼女は監視していた「漢奸」が気づかないよう必死に窓から飛び出し、羊泉村に逃げ帰った。

1943年7、8月頃に、日本軍は二手に分かれて、南と北の両方向から羊泉村を包囲した。池のほとりで洗濯をしていた霊玉は、再び日本鬼子に捕まって拠点進圭に閉じこめられ、昼も夜も無茶苦茶に輪姦された。ある夜、拠点にいる日本鬼子はどこかの村に掃蕩に行ったようで、残っていた日本兵は少なかった。霊玉は窰洞の戸を持ち上げ、下の隙間から潜り出て、再び逃げた。

三回目に捕まったのは、数カ月後のことだった。1944年の旧暦12月に臘八粥⁸を食べていたところ、日本鬼子がまた羊泉村を取り囲み、霊玉は三度捕まった。

今回、霊玉は日本鬼子にひどく殴られた。霊玉の足、腰、肋骨が砕けて、立てなくなった。霊玉は暴行を犯した日本兵の顔を覚えており、なかでも最も凶悪残忍なのは「赤ら顔（紅臉）隊長」と「剥き出し牙隊長」であった。霊玉はひどい暴行をくり返し受けて、何度も気絶した。もう死んでしまったと思った日本軍は、霊玉を村の隣にある「烏河溝」という川に捨てたが、幸運にも同じ村のある親切な老人に見つけられ救出された。霊玉はまる3年間にベッドに臥せっていた。少し歩けるようになった後、彼女は全身の骨が変形したことに気づいた。まっすぐ立ち上がることはできず、かん骨と肋骨が折れ、腕を脱臼し、首は胸腔に、腰は骨盤に入り込んで、160センチ以上あった背丈は140センチぐらいに縮んでしまった。日本兵に右側の耳たぶを引きちぎられた。釘を打ち付けた板で頭のとっぺんを殴られたため、そこは陥没してしまった。2カ所の傷痕には、今でも髪の毛が生えない。5年後、彼女は自分のことができるようになったが、全身病気で苦しんでいるため、長年にわたり、治療とマッサージを受けなければならなくなった。その後、万愛花という名前に改名し、村から都市部へ移住した。

万愛花は次のように語っている。

私はいろんな苦しみを経験し、人生の道も曲がりくねっていた。私のような人間は、村という環境で生き残ることはとても難しい。仕方がないが、そこで窒息したくない。あれから私は結婚もしていない。ある女の子を養女として育てており、「拉弟」と名づけた。私と一緒に暮らしている。私は盂県から陽曲に、陽曲から太原へと転々とし、太原である小屋を借りた。拉弟は幼い頃から私を世話しようとしてくれた。よく私の体調が悪い時に、

⁷ 窰洞（ヤオトン）：中国西北の黄土高原地帯に固有の洞穴式の住居。かたい黄土の崖を掘って作った家屋。

⁸ 臘八粥：まもなく春節（旧正月）を迎える旧暦の臘月八日に、五穀豊穰の祝いとして、五穀の入った粥を食べるといふ風習がある。仏教の伝承行事でもある。

娘は外に出かけて物乞いをしてくれて、私たちの生活を維持してきた。……私は娘のためにやる気を出してがんばる。彼女の母親は怠け者ではない。抗日兵士だ。私は彼女に良き名誉をあげようと思う。

……私が名乗り出て、自分自身がかつて日本鬼子に捕まってひどい暴行を受けたことを認めるのは、世間のみんなに日本鬼子がわれわれ中国人に犯したさまざまな罪を知らせるため、私と私のようなたくさんの姉妹たちに名誉回復を求めるためである。私は日本鬼子を「慰安」したことは一度もないし、絶対にしたくない。1992年に私は東京で開かれた国際公聴会に出席した。私はステージで、過去に日本鬼子に虐待されたこととさまざまな耐え難いことを思い出し、怒りすぎて気絶してしまった。

このために、1993年から私は党籍の回復を要求していた。昔はぜんぜん気にならなかった。もともとは地下黨員であり秘密のことだったから。しかし、今の私は自分自身が抗日の共産黨員であり、あの日本鬼子を「慰安」しなかったことを証明しようと思っている。しかし難しかったなあ。時間が長く経ちすぎて、みんな死んでしまった。私はあちこち訪ねて行き、私が共産党に加入していたことを証明できる古老の幹部を見つけた。孟県の県長張国英を尋ねて、証明してもらった。高昌明、李孟孩も証言してくれた。1994年に50年以上の中断を隔て、私の党籍はようやく取り戻された。……黨員身分が認められてから、私は幹部となった。毎月50元がもらえる。1995年から支給されている。万愛花である私は、たった50元だけの値打ちではないのはよくわかっている。私は私たち中国人被害者の胸に長くわだかまってきたことを日本人の前に思い切り吐き出すように闘っている。我々は抗日者だよ！ お金が少ないと人々に言われたが、私は気にしない。私はただ名誉を回復してもらえばいい。……日本鬼子の罪を訴えるためなら、どこでも行く。これは仕事だ。何でも協力するよ。日本鬼子に罪を認めさせることができるならば。1996、1998、1999年に、私は日本へ行き、日本鬼子が犯した残虐な暴行を訴えた。2000年12月、私は東京へ行って女性国際戦犯法廷⁹に出席した。私は原告として法廷に出て、証言した。12月9日の朝、私は日本軍が犯した暴行を訴えていた時に、服を脱いで法廷のみなさんに私の傷痕を見せようとした瞬間、また気絶してしまった。私の体調はますます悪くなってきた。私はこの法廷で日本の昭和天皇と日本政府が有罪という判決を下すことを強く求めた。彼らは私たちに謝罪すべきで、私たちの名誉回復をしなければならない。彼らは頭を下げて罪を認めなければならない。彼ら自身が間違っているのを知ってこそ、次の世代がこんな暴行に遭うことが避けられるようになるのだ。私は生きている限り彼らと闘う！

⁹ 女性国際戦犯法廷：2000年12月に東京で開催された「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」の略称。日本軍「慰安婦」制度の責任者の刑事責任と日本政府の国家責任を認定した画期的な民衆法廷だった。韓国、北朝鮮、中国大陸、台湾、フィリピン、インドネシアから被害者が出廷した。

二、不撓不屈に訴訟への道を進む

中国における日本軍「慰安婦」制度生存者の対日民間的な訴訟活動において、万愛花は積極的な活動家と言える。彼女は被害者の中では年齢が若くて、頭の回転が速く、話し方が明瞭であることも、その理由である。しかし、最も重要なのは次のことである。彼女は、日本軍に残虐な暴行を受け、何度も危篤に陥りながら何十年にもわたって流離され、人生の苦しみに辛抱強く耐え、心にも大きな傷を負った。それにもかかわらず、彼女は気丈な性格を形成している。若い頃から共産黨員になったからかもしれない。組織や工作活動によって訓練のある程度受けることができたので、今でも、彼女の話し方であれ動き方であれ、幹部らしい風格がある。特に対日関係に対しては、彼女は大局から問題を認識し、物事の道理を明確にわきまえている。彼女が様々な場面でよく言ったことは、「私は一般人ではない、このまま死ぬわけにはいかない。私は中国人の気持ち、真実を追求するために闘って生き残っている。私は死を恐れないが、正義と名誉を回復したいという願望はまだ叶っていない。絶対に正義と名誉を回復しよう！日本政府に謝罪と賠償をさせ、頭を下げて犯した罪を告白させなければならない。日本には善良な心持ちで私たちにお金を出そうと思っている人がいる一方、私たちがお金を狙っているから金をやろうと思っている人もいる。私はその口止め金はいりません！私は彼らの謝罪と正義を求めている。それが一番大事なこと。真実と名誉回復は賠償金と同義と思う。私は喜ぶよ。もし私が生きている間にこの念願を叶えられなければ、私が死んだ後、私の娘、私の孫たちが私の代わりに訴訟を提出する。真実と名誉を回復するまで、絶対に諦めない！」

中国民間人による日本政府に対する日本軍「慰安婦」制度被害の訴訟と賠償を求める活動は、1992年7月から始まった。

1992年初に中国駐日大使楊振亞は、女性を「慰安婦」としたことは、「戦時中に日本の軍国主義者がアジアで犯した恥ずべき一つの罪である。中国人女性も被害者であるという報道があった。私は事実を明らかにすることを希望しており、注目している。」と、明確に指摘した。

3月23日、中国外交部長錢其琛は中国の民間人被害者に関する賠償問題に言及した際、日本の中国侵略戦争が引き起こした複雑な問題について、日本側は適切に対処すべきだと指摘した。日本を訪問する前の4月1日に中国共産党中央委員会の江沢民総書記は、釣魚台芳菲園で日本人ジャーナリストが尋ねた賠償に関する質問に答える時、中国側の立場と原則を重ねて述べた。7月4日、駐中国の日本大使館は、「慰安婦」問題に関する調査結果の覚え書きを中国政府に渡した。日本政府が「慰安婦」の募集と管理に関与したことを認めていたと。中国外交部はすぐ「今後、日本はどのような措置を取るにせよ、韓国と同じように扱ってほしい」という立場を表明した。

このような態勢の下、1992年7月7日、つまり日本の軍国主義者が「七七事変」¹⁰を起こした日に日本軍「慰安婦」制度被害の中国人生存者である劉面換、侯東娥などの4人が、ほぼ半世紀の沈黙を破って駐中国の日本大使館に請願書を渡した。彼女たちは日本政府に

¹⁰ 日本では「盧溝橋事件」と称している。

謝罪し、5~12万ドルの賠償金を要求した。これは中国人被害者の「慰安婦」問題に関する初の賠償要求だった。

しかし、この働きかけはさまざまな理由でメディアに取り上げられず、国内外に大きな影響を与えることはできなかった。中国人被害者もいるという歴史の真相を国際社会に伝えたのは、万愛花であった。

1992年12月9日、東京で「慰安婦」問題に関する初の国際公聴会が、世界各国の正義を求める人たちの合同で開催された。65歳の万愛花は勇敢に登壇して、日本軍から受けた残虐な暴行を訴えた。彼女は涙を流しながら自分が遭った残酷な暴行を告発する途中、悲しみのあまり気絶してしまった。この悲愴なシーンは来場者全員に衝撃を与えた。

山西省では、1993年から日本の左派弁護士と中国人弁護士の協力を得たうえで、3回にわたって約20名の生存者が日本政府に謝罪と賠償を求める民事訴訟を正式に提起した。1998年10月30日、万愛花、趙潤梅と楊秀蓮らが東京地裁に正式に日本政府を被告とする訴訟を提起した。これは中国人被害者が起訴した3つ目の訴訟である。1999年9月、万愛花、趙存妮と高銀娥は一緒に東京の裁判所に証人として出廷し、2000年12月、万愛花は東京での女性国際戦犯法廷に出廷して活動した。その後、彼女は何度も海を渡って日本へ行った。

しかし、日本の裁判所は先延ばし戦術をとり、多くの場合には法廷が数年を隔てて再開したり、開廷してもわずか5分間で休廷を宣言したりしていた。2003年4月24日に東京地裁は原告の請求を棄却するという一審判決を下したが、加害と被害の事実は認められた。5月8日に、原告は東京高裁に控訴した。2005年3月31日に東京高裁は、「原判決を維持する」という二審判決を下した。7月、万愛花ら原告は日本の最高裁に上告した。11月に日本の最高裁は原告敗訴の判決を下した。3つの裁判はすべて原告敗訴になったということで、何度も遠くから渡日した老人たちの胸には悲しみと憤りが交錯していた。

それでも、彼女たちは絶対に屈服しない。母が亡くなっても娘はその遺志を受け継ぐ。彼女たちは老衰のことは気にしないで、お互いに応援し続けた。万愛花は第3回裁判のリーダーである。彼女は日本からの招きに応じて、絶えず来日していた。受けた暴行と名誉回復の願いを何回も繰り返していた。1996年9月、万愛花は日本の参議院議員田英夫と衆議院議員土井たか子からの招待に応じて日本へ行った。東京・神戸・広島・岡山・大阪を訪れ、正義を求める人たちが主催した市民の集会に何度も参加し、日本軍が人権・女性の権利を野蛮に踏み躪ったことを告白した。2008年6月、万愛花は日本の市民団体の招待に応じて講演に行った神戸から、当時の日本首相であった福田康夫へ宛てた手紙を書いた。その手紙で、万愛花は自分自身と、戦争中に被害を受けた他の中国人女性を紹介し、次のように福田首相に尋ねた。「日本の法廷は中国を侵略する戦争中に日本軍が犯した罪を何度も認めているが、なぜ日本という国は私たち被害者に謝罪と賠償をしないのか」。また万は、「私は人生で悪いことを一度もしたことはない。なぜ、そんな被害者である私が裁判に負けたか。日中両国の次世代のため、私は良心がある日本人と共に最後まで闘い続ける！」と、正々堂々と書いた。

三、出師 未だ捷たずして身先ず死し 長えに英雄をして 涙襟に満たしむ¹¹

中国「慰安婦」問題研究センター（略称「センター」）と万愛花大娘¹²との本格的なつながりは1999年から始まった。その前、我々センターは山西省に関する公文書を確認し、関係者たちに連絡を取っていた。そのため、孟県には20人近くの被害者が生存していることを知っていた。私たちは特に山西省に行き、歴史的事実に関する調査と聞き取りを行うことにした。聞き取り調査は、1999年8月の夏休みに決まった。猛暑だった。まずは万愛花大娘を訪ねた。

当時、万は太原市杏花嶺区にある鉱山機械寮の部屋に住んでいた。万は、何十年も病気に苦しんでおり、幼い頃養女になった娘と暮らしている。マッサージ師に出会い、ほぼ毎日、きちんとした治療を受けていなかった腰骨と肋骨をマッサージしてもらっていた。そうしないと、身体が痛くて動けない。特に曇りや雨の日である。そのため、だんだん自分自身がマッサージを習い、自力でできるようになった。他の人にマッサージで病気の治療をするまでになった。私たちは彼女の家で丸1日を過ごし、多くの重要なことを細かく聞き取って補足した。例えば、彼女の家庭状況；1943年から1944年までの間で日本軍に何度も捕まった具体的な時期、捕まった日に庭に生えていた箒の苗木の一種で季節を判断することからお正月の時に鍋の中に何かを蒸していたことまでの回想、そして捕まって監禁されていた窯洞で掛けていた綿布団、その綿布団の所在と証人；その後の彼女の生活状況と証人；彼女のさまざまな考えや態度など。翌日に私たちは特に車で数百メートルを走り、当時の万が被害を受けた孟県の羊泉村に行き、監禁されていた窯洞、捕まった時の川、万の被害を目撃した唯一の生き証人である侯大兎、あの綿布団の持ち主などを探して検証した。万愛花の被害事実に関する細かいところまで確定したと判断し、調査を終えた。

それ以降、センターは、既に認定されていた被害者と同じように、万愛花への経済的な援助を開始した。同胞同士が血肉で繋がっているという精神的な支えと人道的な支援を表すためである。

2000年12月、我々センターは中国国内の検察官、被害者代表、その家族、調査者合計34人と一緒に団体をつくり、十数カ国・地域が参加して東京で開かれた女性国際戦犯法廷に出席した。その期間、私たちは被害者たちと昼夜を問わず生活を共にしていた。この機会に、万愛花に2回目の詳細な聞き取りを行っている。¹³万大娘は中国内陸における原告の代表的な人であり、最初に法廷に出廷して訴訟を起こした被害者である。法廷の外では右翼の宣伝車の拡声器が大きな声で鳴り響き、法廷内ではメディアが集まって黒山の人だかりができ、数十台のカメラが彼女に向けられていた。彼女は泣きながら自分が遭った残

¹¹ 出典は、杜甫の漢詩『蜀相』。蜀相とは諸葛孔明のこと。「孔明は魏を討つ軍を起こしたが戦に勝たないうちに病のため亡くなり、その忠誠は長く後世の英雄たちに涙を流させた」という意味。孔明は自身を犠牲にして漢王朝の復興を目指したが、死ぬまでにその念願が果たされなかったことへの悲しみの気持ちを、名誉回復と平和事業に尽くした万愛花が、その実現を待たずに亡くなったことへの悲しみと哀悼の気持ちに重ねている。

¹² 大娘：ダイニャン。中国の西北地域で、愛情を込めて高齢の女性たちをこう呼ぶ。「おばあちゃん」の意味。

¹³ 当時、陳さんは団体の秘書長だった。

酷な暴行を告発し、綿入りのジャケットのボタンを外して日本軍による様々な傷跡を世界の人々に見せた際、あまりの悲しさによりステージで気絶してしまった。近くの病院に緊急搬送されて治療を受けたが、法廷はそれで1時間を休廷しなければならなかった。幸い万大娘は無事だった。日本に滞在中、万がちょうど誕生日を迎え、团长¹⁴は泊まっていたホテルで彼女に長寿麺¹⁵とおかずを用意し、お祝いした。みんなは、この勇敢で強堅な中国人女性が並々ならない人生の旅にくじけずに遠くまで歩けるようにと願っている。その後の2001年と2002年、センターの主任である蘇智良教授は「慰安婦」プロジェクトの調査と支援のため、2回続けて山西省太原市に万を訪れた。2005年、上海で開かれた被害者に関する報告会の講演者として万が招かれ、中国を訪学したカナダの教師団と交流した。2007年7月5日、上海師範大学の中国「慰安婦」資料館が開館された。万愛花大娘は喜んで招待を受け入れ、義理の息子¹⁶と姪を連れて上海に来た。彼女は疲れをいとわず、アメリカ、カナダから来た教師と生徒たちに自分の苦難の人生を話した。この時、ネットの生放送にも出演した。

生放送中、彼女は「死は恐れないが、正義と名誉を回復したい願望はまだ叶っていない。絶対に正義と名誉を回復しよう！日本政府に私たちに謝罪して賠償させ、頭を下げて犯した罪を告白させなければならない。日本には善良な心持ちで私たちにお金を出そうと思っている人がいる一方、私たちがお金を狙っているから金をやろうと思っている人にもいる。口止め金はいらぬ！私は彼らの謝罪と正義を求めている。真実と名誉回復は賠償金と同義と思う。その実現が私の喜びになるだろう。」ということをもう一度繰り返して述べた。生放送を観ている聴衆たちは、万大娘の気骨に深く感動させられた。ある若い学生は、万大娘に「待っていてください。私は法律を勉強しようと思います。勉強が終わったら正義を取り戻すことを手伝わせてください！」と言った。

ふだんには、万大娘は私たちによく電話で連絡をしてきて、山西省の高齢になっている被害者たちの日常生活について話し合っていた。2008年7月2日の午前中、万大娘は電話で誇らしげに「陳先生、私は日本に行きましたよ。中国人の正義と名誉を回復するために行ってきました。私たちは勝ちましたよ！蘇先生に伝えてください！」と、私に言った。私と蘇智良は7月1日の夜に吉林檔案館から上海に戻ったばかりで、それを聞いて驚いた。裁判は勝ったのだろうか、と。が、彼女は肯定的にこう語ったのである。「私たちは負けてはいません。皆が私たちを支えてくれています。元日本兵さえも証言して、「こういう事実があった。過去には日本人が過ちを犯した。中国人に謝罪して賠償するべきだ」と言ってくれました。私は正義と名誉を回復したのです！私は飛行機に乗る時に足をねんざしてしまったのですが、誰かが気遣って骨折したかもしれないと言ってくれました。日本に着いてから病院に行き、治療を受けてから仕事をやり続けたのですよ。その後、日本でエレベーターに手を挟まれたのですが.....ご心配なく、大丈夫。体調は良いです。やるべきことはすべてやりました。蘇先生に伝えてください！」ここまで聞いて私は、万は裁判の

¹⁴ 团长は蘇智良。

¹⁵ 長寿麺：中国では誕生日に麺を食べる風習がある。麺が長いと長寿になるとして、誕生日に麺を食べて長寿を願う意味が込められている。

¹⁶ 養女の夫。

勝敗ではなく正義の闘いの勝敗について語っているのだとわかった。彼女が言ったのは、同じ年の6月頃に彼女が日本の市民団体の招きに応じて神戸で巡回講演をした時に、当時の福田康夫首相に宛てた手紙を正々堂々と書いた時のことだと、私は気づいた。

これが万愛花だ。自分と姉妹たちの正義と名誉を回復するために、人生と尊厳をかけて最後まで力を尽くし、20年以上にわたって世界に屈服しない呼びかけを発信している中国人女性である。

万愛花が数年間に病に伏していることを知ったセンターでは、センターの主任を務める蘇智良教授が2012年5月に太原市の病院へお見舞いに行った。2013年7月31日、センターはボランティアを派遣して再びお見舞いに行ったが、それが永遠の別れになってしまおうとは、誰も思わなかった。9月4日に万さんの養女は、母親が3日間の昏睡状態に陥った後、4日の0時45分に亡くなったことを知らせてくれた。「母が最も心残りだったのは、日本に対する裁判だ。私に対日訴訟を継承してくれと言ったので、私は娘として必ずその遺志を受け継ぐ！」と娘は言った。

この文章を書き終えたところに、海を越えて「慰安婦」問題を合同研究している中国系アメリカ人丘培培¹⁷教授からの手紙が届いた。彼女は「万愛花大娘に深い哀悼の意を表します。万大娘に、私たちが書いた本を出版するのを見てもらえなかったことは非常に残念ですが、彼女の勇敢な人生は、私たちが書いた『中国「慰安婦」』という本を通じて世界中に広まり、永遠に銘記されます。」と書いた。

万大娘、聞こえましたか。この世界は、あなたの遠ざかる叫びに応えていますよ。

<2013年9月6日付『東方早報』の「逝者」というコラム欄¹⁸に掲載>

¹⁷ 丘培培：英文の名前は Peipei Qiu であり、ヴァッサー大学の教授である。2013年に日本軍「慰安婦」制度の中国人被害女性に関する著書『Chinese Comfort Women Testimonies from Imperial Japan's Sex Slaves』（The University of British Columbia Press, 2013）が出版された。

¹⁸ 「逝者」は「亡くなった人」を意味する。誰かが亡くなったことを報道するだけでなく、その人の人生を伝えて歴史を動かすことを、この欄創設の趣旨としている。